



加藤 憲彦さん(45)
理香さん(46)
＝胆沢区若柳字清水川＝

雨の日も晴れの日も

●どんなときも一緒に素敵な夫婦を紹介

ことしでちょうど結婚20年を迎える加藤夫妻。野菜苗やシクラメンなどを生産する「加藤園芸」を営んでいます。二人が出会ったのは金ヶ崎町の県立農業短大(現在の県立農業大学校)でのこと。同級生で、席が前後だったことがきっかけとなり交際がスタートしました。非農家出身ながら、農業に憧れがあったという理香さん。結婚を機に、本格的に就農しました。

加藤園芸は若手ふるさと農協が供給するピーマン苗、トマト苗のほとんどを生産するハウス15棟を有する大農家です。もともと野菜中心でしたが、憲彦さんの就農を機に東向けのシクラメンの栽培を始めました。

「初めは独学。6、7年はものにならなかつた」と当時を振り返る憲彦さん。その後、県内の生産者で作るシクラメン研究会に参加してから生産が安定し、今では10棟で40種以上のシクラメンを生産しています。「夫は体が大きいけれど、細やかな管理が得意なんです」とほめる理香さんに、憲彦さんは照れ笑いです。

3人の子宝にも恵まれ、地域の農家仲間とも夫婦ぐるみで付き合うなど、充実した日々を送る加藤夫妻。「良い苗を作って、農家の皆さんのお役に立ちたい」と思いを語る憲彦さんを、理香さんは頼もしそうに見つめていました。

夢トーク

将来の夢は「甲子園出場」



及川 真優くん
(水沢区・佐倉河小学校6年)

Interview

—学校での役割は？
計画委員会で副委員長をしています。運動会が成功して楽しかったです。

—いちばんの思い出は？
修学旅行です。班の5人で仙台市内を探検し、目的地の仙台市歴史民俗資料館まで地下鉄やバスで移動しました。

—普段、どんなことをして遊んでいますか？
ドッジボールとドッジビーを合わせたオリジナルの遊びです。友達5人で「レク会社」という遊びを企画するグループを作っ

ていて、昼休みにクラスのみなどで遊んでいます。

—がんばっていることは？
野球です。3才から父や兄がコーチしてくれて、2年の時にSSスポーツ少年団に入団しました。毎日練習しています。今は背番号1番でピッチャー。バッティングは少し苦手かな。

—将来の夢を教えてください。
甲子園出場です。市内の高校で甲子園に出場できたところはないから、夢を叶えたいです。

—もし出場できたら？
プロ野球選手になれるかな？

青春讃歌

中高生の部活動や委員会活動を紹介

23

若柳中学校卓球部

- ◎部員数 16人
- ◎顧問 千葉 優子 先生
- ◎主将 佐々木 隆誠 君(2年)
- ◎部長 高橋 岳人 君(2年)



地域の期待を背負い 古豪復活を目指す

本年度の中学総合体育大会を終え、1、2年生9人が中心となる体制をスタートさせた若柳中学校卓球部。部員同士が皆友達の明るいチームで、自主性を重んじ、あいさつの声出しなどにも熱心に取り組んでいます。

かつては全国大会ベスト8入りを果たした強豪校でしたが、最近は県大会出場から遠ざかっています。6月の地区大会でも予選リーグで優勝校を破ったものの、決勝トーナメントでは勝ち進むことができず、悔しい思いをしました。その悔しさをばねに、新部長の高橋君は

「新人戦地区大会優勝」と力強く目標を掲げます。目標に向け練習を重ねたい部員たちですが、平日は学校での練習時間が30分ほどしか取れません。そこで、OBや父母の協力を得て、週3回、胆沢総合体育館で夜間練習を行っています。「コーチからは、フォームや体の動かし方をよく指導されます」と高橋君。夜間練習で基礎を、学校では実戦形式で練習を積み重ねています。

顧問の千葉先生からは「デュースになると競り負けてしまう」と精神的な弱点を指摘されている部員たち。そこで、何か集中力を強化する取り組みができないか部員全員で考えているそうです。

この夏は新人戦に向けた重要な時期。彼らの思いが、今、試されようとしています。



練習時間が短いからこそ集中が重要



猛暑が続いておりありますが、いかがが過ぎでしょうか。

岩手国体のリハール大会を兼ねた東北総合体育大会は7月上旬にカヌー大会、8月上旬にバスケットボール大会が市内で開催されました。どちらも成功に終わり、来年の国体につながる良い大会となりました。携わっていただいた皆さん、ありがとうございました。

カヌー競技種目ワールドウォーターを初めて見ましたが、水しぶきを上げながら難所を突破し勢いよく川を漕ぎ下る姿は迫力満点です。競技団体から、全国でも三本の指に入る競技場とお墨付きをいただきました。ぜひ一度ご覧いただきたいと思っております。

7月12日、本市と金ヶ崎町を会場に約1万人が参加して行われた県総合防災訓練に出席しました。洪水や地震によ

る土砂流出災害などを想定した孤立地域救助訓練や倒壊建物救出訓練など、多種多様な訓練が展開されました。当地域はカスリン・アイオン台風の災害や岩手・宮城内陸地震そして東日本大震災を経験しており、災害に対する備えの重要性を改めて痛感したところです。この訓練を契機に、防災意識の向上に努め、安心して暮らすことのできるまちづくりに努めてまいります。

7月25日に、ILCの実現と地域社会の展望を語り合う「ILCシンポジウム」が市文化会館で開催されました。沿岸と内陸の自治体の首長と関係者が集まり、パネルディスカッションが行われました。いずれのパネリストも「ILCは地域振興に果たす意義が大きく、高い価値がある」と訴えました。ILCの実現は私たちの文化を見つめ直し日本の価値を高める良い契機になります。行政、有識者、地域住民が一体となり、ILCを迎える意識づくりを醸成してまいります。

奥州市長 小沢昌記